学 会 報 告

第11回国際老年学会議に出席して
(The XIth International Congress of Gerontology)

富山市民病院五福分院 長谷田 祐 作

第11回国際老年学会議(The XIth International Congress of Gerontology) が昭和53年8月20日から同月25日までの6日間、東京都品川のパシフィック・ホテル(Hotel Pacific)で開催された。

私は日本老年医学会に正式に加入して、まだ日が浅かったが、折よく国際会議に参加する機会を得、その雰囲気に聊か感激の気持ちを禁じ得なかった。

以下総会講演などを主体として大会の概要を報告し会員諸兄の参考に供したい。

開会式など

開会式には常陸宮殿下、同妃殿下が御出席殿下のお言葉、Danon(ダナン、国際老年学協会長)、村上元孝会長、伏見日本学術会議会長の各挨拶に次いで小沢厚生大臣、美濃部都知事、武見医師会長が、それぞれ祝辞を述べられた。

祝辞の中では武見会長のみが大会の共用語として定められてある英語で滔々と挨拶されたのは印象的であった。

総会講演としては(以下敬称を略す)

D.F.Chevotarev (ソ連・Institute of Gerontology)

R.N.Butler (米・国立Aging研究所長)

中村 元(日本・東大名誉教授)

K.Kaplan (イスラエルHaifa大学及び米・Los Angeles)

の順で行われた。座長はD.Danan (イスラエル、前記国際老年学協会長)である。

Chebotarevは「Biology of human aging and the disease」という表題に示されるように生物学的領域における長い研究歴に基づき、いわば基礎医学的見地からの論説として哺乳類の進化過程における人間の特徴は寿命が著るしく延長したことであると述べた。

この寿命の延長は人間と環境との関連様式の改善に起因する。すなわち人間が環境に適応するとともに、環境を人間の生存に適合させる努力がなされていることに原因している

人間の Aging (加令・老化) は遺伝的なProgramによって決定されるものと通常考えられているが、環境的要因についても並行的に研究が進められなければならない。

またAgingの過程と疾患の進展との関連を正しく把握することは理論的、基礎的に重要であると同時に臨床面とも密接に結びついていることを多くの実例を挙げて説明した。

R.N.Butleirは「Man in aging, philosophic basis of gerontology from the perspective of clinical medicine」と題して精神医学的基礎の上に心理学的、社会学的配慮を加味した論説を述べた。

近年における老年人口の増大は乳幼児や若年層の死亡減少に基づくものである。

Agingは当然のことであり喜ぶべきであり軽蔑の対象となるものではない

老年期は単に死を迎える時期として止まるべきでなく、その価値を背定すべきであり、自然科学的、社会科学的研究を更に進めて、

より積極的な豊かな時期とするよう努力すべきである。

中村は「The significance of "Aging" in eastern thought」と題し、東洋思想におけるAgingの意義・重要性について述べた。

Agingは何人にとって避け得られぬ宿命であり東洋思想の中でも色いろと重要な意義づけがなされてきた。

例えば仏教で、老年はむしろ嫌悪の感情で取扱われてきたと言えるが、儒教ではむしろ畏敬の念をもって処遇されてきたと言える。

日本では、この影響をうけ、長老、大老、老中、老師などの語に含まれるように、封建制度の中に尊敬の念が育まれ、家老、家長、家兄などの語を通じて年功序列的社会形態が維持されてきた。

こうした反面「老いては子に従う」という諺があるように隠居という考え方も、社会的に根強い慣習として実行されている。

また「輪廻」という東洋に独特と考えられる思想も見られることなど、宗教的、哲学的に数多くの実例を挙げて説明した。

K.Kaplanは「Age in western theory and practice」と題して中村とは対照的に西洋的思想の中でのAgingの概念を述べた。

老年者は（ユダヤ・キリスト教で）大へん尊敬されて取扱われる反面「若者崇拝主義」の正反対のpatternとして年をとっているからという理由に基づく偏見として「老人差別主義」も存在する。これは人種差別や性による差別に通ずるものである。

老年期を開花させるためには高令ということだけで、自然や社会から退陣することがないよう、多くの機会を準備することが大切である。

老人にも自由とchance は平等であるべきである。

その他

本国際会議には49ヵ国、海外より 1,200名、国内より800名、計2,000名が参加した。

総会講演には上記の如く開会時4題、閉会時には村上元孝座長の下で下記の5演者により、それぞれの演題について論述が行われた。

1 太田邦夫（日本、東京都老人総合研究所長）
Progresses in biomedical gerontology

2 W.F.Anderson（英.glasgow大学）
Achievement in geriatric medicine

3 S.Bergman（イスラエル・Tel-Aviv大学）
The future of human welfare of aged.

4 J.E.Birren（米・Southern California 大学、Andrus老年学研究所長）
Progress and trends in psychological research in gerontology.

5 L.Rosenmayr（オーストリア、Vienna社会学研究所）
Progress and unresolved problems in sociogerontological theory

Symposiumは全部で56、部会は89、発表論文は総数903に上った。

この中には本県の黒部厚生病院・高桜他2名の「Intrarenal vascular changes with age and disease」がSymposium "Renal and Electrolyte Disorders" に出演されていたことを附記したい。

また「死を見とる医学」、「三世代同居是非論」など新聞紙上を賑はしたものもあった。

日本でも勿論であるが、国際的に老年学は
生物学、基礎医学的領域
臨床医学領域
社会科学的領域
に3大別されるが、本国際会議は国内的には日本学術会議と日本老年学会、日本老年医学会、日本老年社会科学会が中核となって運営されたものである。

おわりに

今や日本は世界に冠たる長寿国の仲間入りをしている現実から見て、今回の国際会議を一つの契機として学問的分野での研究の充実進展が期待されると共に、社会的な対策、施設の面など一層の改善・拡充が希望される次第である。

富山県は国内各都道府県の中でも、より早く高度の老年社会を迎えようとしている折柄この方面の関心も高いが、老年医学を基盤として充実した対策が浸透するよう望みたい。

参考資料

1) Program of The XIth International Congress of Gerontology
2) Abstracts for plenary sessions & symposia.
3) Abstracts for sectional sessions.
4) New Medical World Weekly No.1320 (1978. 10. 16)
5) 日本医事新報 No.2847 (昭和53. 11. 18)